※湘南森林霊園は公益財団法人相模メモリアルパークが事業主体となる大型公園墓地です。出雲大社相模分祠から3.5㎞・車で約12分の秦野の里山に開苑しております。（土・日・祝日は秦野駅より送迎バスあり。予約制）

【神奈川県秦野市渋沢三四九―二十二】

湘南森林霊園全景（敷地面積20万㎡）

※湘南森林霊園はエントランスホール（休憩室）、駐車場などすべてが霊園内でまかなえるよう施設が充実しております。
また小さなお子さまからお年寄りまで全ての年代の方々に「お参りしやすい公園墓地」をコンセプトに園内には段差の少ない通路、オストメイト対応トイレなどお参りの方々が使いやすく設計されております。
※園内におきましてはお車での御移動が可能になります。

〈医薬の神〉大国主大神様に疫病の鎮遏（ちんあつ）を願って

島根県出雲大社・出雲大社教教務本庁発行『幽顕』より抜粋。

・・・・・・・・・・・・

医薬の神として古来より信仰される大国主大神様。〝医薬の神〟としての大国主大神様を信仰した先人たちが疫病とどのように戦ってきたかを見ていきたい。

（一）新型コロナウイルスが猛威を振っている。

この様な中、事態の早期鎮静化を願い、三月八日には宗祠御本殿において朝御饌に併せ「新型コロナウイルス感染症流行鎮静祈願祭」が斎行された。同日の夕御饌からは感染拡大状況が改善されるまで、御日供祭祝詞に併せて流行鎮静の祝詞奏上が行なわれている。

《疫病との闘い》

人類の歴史はまた疫病との戦いの歴史でもあり、歴史を紐解くと、ペスト、天然痘、悪性のインフルエンザなどにより世界中の人々が民族存亡の危機に何度も見舞われている。

わが国も例外ではない。例えば『続日本紀』などの史料に残されている奈良時代の天平の天然痘の大流行（七三五～七三七）では、ある統計によると当時の日本の総人口の二五～三五パーセントに当たる一〇〇万～一五〇万人が天然痘によって死亡したとの推計がなされている。

この様な事態に、歴代の為政者たちはどのように対処してきたのであろうか。天平の天然痘の終息から数年後には農業生産性を高めるため、農民に土地の私有を認める「墾田永年私財法」が施行されたが、これは疫病による痛手からの回復を目指す社会復興策としての〝大御心〟であった。

《医薬の神様》

本年は日本最古の勅撰の正史である『日本書紀』が編纂されて、ちょうど一三〇〇年に当たる。その『日本書紀』には、「大己貴命（おおなむちのみこと）（大国主大神様の別名）と少彦名命（すくなびこなのみこと）と、力を合わせ心を一つにして天下（あめのした）を経営（つくる）る。また、人民、畜産の為には、其の病を療むる方を定む」と記されている。

大国主大神様は、傷ついた兎に治療を施す「因幡の白兎」の神話、また神託を受けた崇神天皇が大物主大神（おおものぬしのおおかみ）様（大国主大神様の別名）を大和の三輪山にお祀りすることにより疫病の蔓延を防がれた説話が伝わるなど、神代の昔から医薬の神として篤い崇敬を集めていた。その信仰は『日本書紀』と同時期に編纂された『伊豆国風土記（逸文）』、『伊豫国風土記（逸文）』に、箱根温泉や道後温泉を利用した医療についての伝承が残っていることからも、広く日本国内に広まっていたことが判る。

現在でも大和の三輪山（奈良県桜井市）にご鎮座する、大物主大神様をお祀りする大神神社では、疫神の鎮遏（ちんあつ）を願う鎮花祭（はなしずめのまつり）がお仕えされている。古くは春に花びらが飛散する際に疫神が四方に分散し、疫病が流行すると考えられた。「遏」は、「邪悪なものを呪儀」によってさえぎりおさえ、とどめる」という意味で、この疫神を鎮遏するために必ず鎮花祭をお仕えしなければならない、としている。

目に見えないウイルスの脅威は、現在の我々とは比べ物にならないほどであろう。古代に生きた人々は大国主大神様の助力を請い願ってきた。先人たちの努力と〝医薬の神〟である大国主大神様の御蔭によって、私達は今を生きることが出来るのである。

（二）《先人の足跡》

江戸時代、幕末の福井藩に、笠原白翁（良策）という天然痘の撲滅に力を尽くした医師がいた。白翁は天然痘のワクチンである牛痘苗の輸入を当時の福井藩主松平春嶽公に二度に亘って上申し、国内にワクチンを広めた先駆者である。彼が著した『牛痘鑑法（ぎゅうとうかんぽう）』の中表紙には「毎旦大少二柱ノ神像ヲ奉禮シ、終歳東西万邦ノ方書ヲ耽読ス」と記されている。

大少とは、力を合わせて日本の国土をお創りになられた大国主大神様と少彦名命（すくなびこなのみこと）様のことである。白翁は日々大少二柱の神様の助力を請い願い、ついに天然痘ワクチンの培養と頒布に成功した。

尚、天然痘は人類が唯一絶滅させた病原菌であるとされ、一九七七年にアフリカで患者が確認されたのを最後に世界のどこでも確認されていない。笠原白翁をはじめとする世界中の医学者のたゆまぬ努力によって、その偉業は成し遂げられた。

《尊福公と疫病》

明治十九年六月、岡山県下はコレラの大流行に見舞われており、県は諸興業をはじめ集会、更に小学校の授業を停止する通達を出し、懸命に鎮静の策を講じていた。このような状況下、岡山を訪れた出雲大社教初代管長千家尊福公を待ち受けていたのは、その御教えに接したいと願う数多の信徒であった。

意を決せられた尊福公は直ちに県庁に至り、大社教の主旨、療病衛生の道は大国主大神様の教示されるところで、本教の最も注意するところとの旨を主張され、かねて大社教にて刊行された『虎列拉豫防説諭書（これらよぼうせつゆしょ）』を提示して開教許可を求められた。

県令（知事）はついに大社教に限り開教を許可した。コレラ流行の中、尊福公は数千枚の説諭書を信徒に授与しつつ連日御教えを説かれた。神頼みだけで疫病から逃れようと思い治療を怠るのは誤りだと諭し、大社教信徒が予防摂生を尽くして疫病の蔓延を防ぎ、県民の模範となるよう説いたのである。

自身が疫病に感染する危険を顧みず布教を敢行し、コレラの蔓延も防がれた尊福公のお姿に人々は深い感銘を受けた。正しい知識と深い信仰心、そして人々を救済したいと願うそのお姿は、我々の道しるべである。

現在もマスクや食料品の買い占め、転売など嘆かわしい報道が後を絶たないが、今を生きる私たちは、自らの生命の危険をも顧みずに疫病と戦った偉大な先人達の姿を見習い、その上で〝医薬の神〟大国主大神様の御加護を願うべきであろう。

以上　幽顕三・四月号より抜粋　原文ママ

・・・・・・・・・・・・・・・

昨今の甚大な自然災害、コロナ禍の社会を見ると現代人は人の生き死、自然の万象に対し、畏敬と恐れを忘れかけていたのかもしれない。思わぬ災害、疫病の蔓延は世の中にとって大変な損害である。残念ながら不幸に見舞われた方々におかれてはお悔やみの言葉も尽きない。

疫病が蔓延する中、追い打ちをかけるように、一部の人による買占めや転売行為、ストレスからなる隣人間の不和、感染者に対する差別行為等がしばしば聞かれる。コロナ禍の社会不安は病だけでなく、残念ながら人間の心の弱さをむしばんでいるともいえよう。

例えワクチンや科学的な解決策が見当たらなくても先人たちは力を合わせこれらの疫病を耐え忍び必死に現代に命をつないできたことは間違いない事実である。

健康祈願・悪病退散の祈りは神道の伝統文化にもしっかりと受け継がれている。決して心を病むことなく、強い心と勇気をもってこの困難に立ち向かい、国民皆力を併せて乗り越えたい。